

学生の「読み聞かせ」の実情と課題 ～「心の理論」をふまえた伝え方～

前田敬子

(2016年3月1日受理)

1. はじめに

保育者を目指す学生はどのような絵本を実習に向けて準備するのか。実習後に自分の読み聞かせをどの程度に評価するのか。絵本の選択や読みの技法の課題は何で、どのようにすれば克服できるのか。学生の読み聞かせに関する自己評価の集積から、改善の視点を得たいと考えた。

2. 方法

実習後の学生に実習中に読み聞かせした絵本の題名、対象年齢、幼児の反応（4段階評価と記述）を「振り返りシート」に書かせた。異年齢クラスの場合は、そこに含まれるすべての年齢のクラスで読んだものと仮定して加算した。結果、のべ1000例を超えるデータを収集できた。

収集データ分析から、学生が選ぶ絵本と子どもの反応（年齢別の反応）がわかる。併せて、学生の読み聞かせの課題も明らかになる。

3. 学生が選ぶ絵本

対象となる子どもの年齢枠を外し、学生が選ぶ絵本上位10位を挙げると、表1の通りである。

それぞれの本について、読み手の学生に、子どもが望ましい反応であったかを尋ね、「とても良い」「良い」「どちらかと言えば悪い」「とても悪い」の4段階で評価させた。表の右欄は、評価の割合を示す。読み手数の5割を超える割合欄は塗りつぶして示した。

たとえば、『わたしのワンピース』を読み聞か

せた学生は24人である。これまでの調査段階では最も多くの学生がその本を選んだ。24人のうちの54.2%が子どもの反応は「とても良い」と答え、33.3%は「良い」、12.5%は「どちらかと言えば悪い」と答えている。

表1. 実習生は何を読むか（多い順）

		自己評価・子どもの反応				
		人数	とても良い	良い	悪い	とても悪い
1	わたしのワンピース	24	54.2%	33%	12.5%	
2	しろくまちゃんのほっとけーき	15	46.7%	26.7%	13.3%	13.3%
3	どろんこハリー	15	46.7%	40.0%	13.3%	
4	くれよんのくろくん	11	18.2%	36.4%	45.4%	
5	おおきななぐ	10	60.0%	10.0%	30.0%	
6	キャベツくん	10	90.0%	10.0%		
7	だるまさんが	10	90.0%	10.0%		
8	はらぺこあおむし	10	60.0%	40.0%		
9	ざつまのおいも	9	67.0%	22.2%	11.1%	
10	おおきくなるっていうことは	8	75.0%	25.0%		

この表から、以下のことが分かる。

『しろくまちゃんのほっとけーき』『どろんこハリー』『くれよんのくろくん』を選択する学生は多いが、その自己評価は比較的高くない。反対に『キャベツくん』『だるまさんが』などは、実習生にとって子どもの好反応を得やすい。

では、学生が読んで成功しやすい本とはどのような本であろうか。読み聞かせ実施学生の多寡によらず、実施人数に占める子どもの反応が良いものから順に示すと表2のようになる。（読み聞かせ人数が5人未満の本は除外した。）

表2. 読み聞かせ好感度の高い本

	人数	とても良い	良い	悪い	とても悪い
1 ねえ、どれがいい?	6	100.0%			
2 キャベツくん	10	90.0%	10.0%		
3 だるまさんが	10	90.0%	10.0%		
4 へんしんトンネル	6	83.3%	16.7%		
5 100かいだてのいえ	5	80.0%	20.0%		
6 きんぎょがにげた	5	80.0%	20.0%		
7 おおきくなるっていうことは	8	75.0%	25.0%		
8 ざつまのおいも	9	67.0%	22.2%	11.1%	
9 おおきなかぶ	10	60.0%	10.0%	30.0%	
10 はらぺこあおむし	10	60.0%	40.0%		
11 ぐりとぐら	5	60.0%	20.0%	20.0%	
12 へんしんマラソン	5	60.0%		40.0%	
13 わたしのワンピース	24	54.2%	33.3%	12.5%	
14 しろくまちゃんのほっとけーき	15	46.7%	26.7%	13.3%	13.3%
15 だるまさんが	15	46.7%	40.0%	13.3%	
16 せんたくかあちゃん	5	40.0%	40.0%	20.0%	
17 ぞうくんのあめふりさんぼ	5	40.0%	40.0%	20.0%	
18 うずらちゃんのかくれんぼ	6	33.3%	50.0%	16.7%	
19 カマキリくん	6	33.3%	66.7%		
20 いいからいいから	7	28.6%	71.4%		
21 そらまめくんのベッド	7	28.6%	57.1%	14.3%	

『ねえ、どれがいい?』を読んだ6人全員が子どもの反応が「とても良かった」と答えている。『キャベツくん』『だるまさんが』はともに10人中9人が「とても良かった」と答えている。

更に、対象年齢別に分けると、何歳の子どもの対象にどの絵本を選べば、学生の読み聞かせが成功しやすいかの詳細が分かる。

4. 対象年齢別 学生が選ぶ絵本

表3から表7まで、未満児、満3歳児、3歳児、4歳児、5歳児の順に見ていく。読み聞かせ人数の多い順に並べ、自己評価のうち「とても良い」の評価のみ表示する。ただ、年齢別に絞り込むとデータ数が未だ少ない。そのため、信ぴょう性もさほど期待できない。だが、ある程度の傾向性は読み取ることができる。実施人数が少なくとも「とても良い」が「0%」の場合は、その本が実習生にとって何がしかの難しさを含んだもの、あるいは、絵本と子どもの年齢とのミスマッチではないだろうか。たとえば、3歳児対象の『ぞうくんのあめふりさんぼ』『ねずみのいもほり』『そらいろのたね』、4歳児対象の『くれよんのくろくん』などは、学生にとって何がしかの難しさを含むか、対象児とのミスマッチである。

「読み聞かせ」の成功不成功には、複数の要素が絡む。以下、①絵本そのものもつ潜在的な性質、②子どもの発達（他者の心の理解など）、③学生の読みの技法という三つの視点から見ていく。学生の読み聞かせに対する子どもの反応、反応する年齢の幅によって絵本をタイプ分けし、学生は読みの技法をどのような絵本対象にどのように高めるべきかの考えを述べたい。

表3. 0~2歳児

	人数	とても良い割合
1 しろくまちゃんのほっとけーき	7	42.9%
2 だるまさんが	6	100.0%
3 いないいないばあ	3	66.7%
4 うずらちゃんのかくれんぼ	3	66.7%
5 きんぎょがにげた	3	66.7%
6 はらぺこあおむし	3	66.7%
7 くだもの	3	33.3%
8 わたしのワンピース	3	33.3%

表4. 満3歳児

	人数	とても良い割合
1 しろくまちゃんのほっとけーき	4	50.0%
2 わたしのワンピース	4	50.0%
3 だるまさんが	2	100.0%
4 つきよ	2	100.0%
5 おおきくなるっていうことは	2	100.0%
6 そらまめくんのベッド	2	50.0%
7 だるまさんが	2	50.0%
8 おおきなかぶ	2	50.0%
9 ざつまのおいも	2	50.0%
10 くれよんのくろくん	2	0.0%
11 ねずみくんのチョコキ	2	0.0%

表5. 3歳児

	人数	とても良い割合
1 わたしのワンピース	10	60.0%
2 ざつまのおいも	4	100.0%
3 はらぺこあおむし	4	75.0%
4 どうぞのいす	4	25.0%
5 くれよんのくろくん	3	66.7%
6 ちよつとだけ	3	66.7%
7 へんしんトンネル	3	66.7%
8 ぐりとぐら	3	66.7%
9 ぞうくんのあめふりさんぼ	3	0.0%
10 ねずみのいもほり	3	0.0%
11 そらいろのたね	3	0.0%

表6. 4歳児

	人数	とても良い割合
1 キャベツくん	4	75.0%
2 わたしのワンピース	4	75.0%
3 だるまさんが	4	25.0%
4 へんしんトンネル	3	100.0%
5 おおきなかぶ	3	66.7%
6 カマキリくん	3	66.7%
7 あかちゃんかたつむりのおうち	3	33.4%
8 くれよんのくろくん	3	0.0%

表7. 5歳児

	人数	ととも良い割合
1 どんごハリー	8	4 50.0%
2 にじいろのさかな	4	1 25.0%
3 キャベツくん	3	3 100.0%
4 おおきくなるっていうことは	3	2 66.7%
5 スイミー	3	2 66.7%
6 あめがふるときちょうはどこへ	3	2 66.7%
7 いいからいいから	3	1 33.3%
8 はらぺこあおむし	3	1 33.3%
9 わたしのワンピース	3	1 33.3%

5. 絵本の性質

これらの数値データと子どもの反応の中身に関する記述から、絵本に最適な年齢や子どもたちに引き起こす反応の傾向が自ずと分かる。

そして、0歳から5歳を範囲としたとき、絵本の年齢守備範囲と子どもの反応によって、絵本は、下の表のようなAからCのタイプに分けることができ、そのタイプごとに読み方の改善方法が異なるものと考えられる。

	A	B	C
年齢の幅	幅広い		特定
反応の中身	一通りである	多様である	一通りである

幅のある年齢層に喜ばれる絵本の中でも、Aタイプの絵本は子どもの年齢に関係なく一通りの反応を引き起こす。それに対して、Bタイプの絵本は年齢ごとに異なる反応を引き起こす。Cタイプの絵本は、守備範囲年齢が狭く、特定の年齢層に非常に受けが良い。そして子どもたちの反応は一通りである。

『キャベツくん』は、未満児から5歳児までの年齢層の子どもも一緒に「ブギャ」という言葉と変身後の姿を喜ぶことが分かる。『ねえ、どれがいい?』も3歳児から5歳児までの年齢の子どもも、読み手から質問されていると受け止め、よく反応する。『さつまのおいも』は、満3歳児から5歳児までの年齢層の子どもも、おならの場面で歓声を上げる。

これらは、「ブギャ」の声や変身後の姿の面白さ、選択肢から想像して選ぶ楽しさ、おならの滑稽さなど、面白さの中心が「絵」や特徴的な「音（言葉）」にある。つまり「わかりやすい面白さ」が「わかりやすい反応」を引き出す、上記Aタイプの絵本である。

だが、『はらぺこあおむし』『わたしのワンピース』『しろくまちゃんのほっとけーき』『おおきなかぶ』などは、どの年齢も一緒に喜ぶものの、年齢ごとに反応が異なる。これらは上記Bタイプである。一般的に、低年齢児は、登場する食べ物や動物の名前、擬声語・擬態語、掛け声に興味を示し、少し年齢が上がると読み手の問いかけに回答し、更に年齢が上がると登場人物を評価（批判）するようになる。

たとえば、『はらぺこあおむし』は、未満児は食べ物の名前を言い、3歳児は数えることに興味をもち、5歳児はあおむしを「食べ過ぎ」と批判することもある。

『わたしのワンピース』は、未満児や満3歳児はワンピースの柄の変化をじっと見つめ、3歳児は「にあうかしら?」の問いに「似合う」と答え、「ラララーンロロローン」の歌を繰り返す。4歳児になると、「かわいい」と評価する。

『しろくまちゃんのほっとけーき』は、未満児はケーキを焼く場面の擬音語・擬態語を楽しみ、4～5歳児になると絵本の中のケーキから実際のケーキを思い出して「おいしそう」と言う。

『おおきなかぶ』は、未満児や満3歳児は「うんとこしょ、どっこいしょ」の掛け声を一緒に唱えるが、4～5歳児になると次に出て来る登場人物を覚えていて先回りして口にする例もある。

上記Cタイプ、0歳から5歳の幅のうち守備範囲の年齢が狭い例には、子どもに特定の能力が備わらない限り、理解できない絵本が挙げられる。たとえば『へんしんトンネル』は、逆さ言葉が理解できる年齢に達していないと、絵本の面白さが伝わらない。

特に「登場人物（他者）の心」を理解する能力が備わって初めて面白さが伝わる話がある。では、子どもは何歳ごろから、他者（作中人物）の心を推測できるのだろうか。

6. 他者の心の理解と絵本

子どもが自分とは異なる人の心的状態（自分とは異なる信念や意図をもっていること）を理解することの研究は「心の理論」研究と呼ばれ、誤信

念課題によって試される。これまでの研究によると、「人物Aは、Xと思っている」という一次的信念に比べ「人物Bは、人物AはXと思っている、と思っている」という二次的信念は2年ほど後に獲得されることが分かっている。

筆者は、誤信念課題に関する論文¹⁾に示唆を得、誤信念課題に似た構成の絵本を発見した。そして、物語(小説、映画)の理解には複数の登場人物の心の理解が不可欠だが、聴き手に作中人物の心を伝える絵本の読み聞かせ技法に想いを馳せた。示唆を与えた論文は、従来の二次的信念課題に代わる新課題の提案が趣旨だが、筆者は課題構造分析を絵本理解に活かす立場から、誤信念課題と絵本の話と比較検討したい。

(1) 一次的信念課題

誤信念課題のうち、「人物Aは、Xと思っている」の理解を調べる課題は一次的信念課題と呼ばれる。一次的信念課題の例を以下に挙げる。

「マクシ課題」は、「母親がチョコレートを買ってきた。マクシ(男の子)は、チョコレートを緑の戸棚にしまい外出する。マクシの留守中、母親がチョコレートを緑の戸棚から青の戸棚に移してしまった」というストーリーを聞かせ、「帰宅したマクシは、チョコレートを最初にどこに取りに行くか」と被験児に質問するものである。

この課題で、一次的信念は4～7歳にかけて獲得されると分かった。それより幼い子どもは、チョコレートが青の戸棚に移されたことを自分は知っているため、マクシが探すのも青の戸棚だと答えてしまう。自分の知ることはマクシも知ると考えるためである。その後、自閉症児研究で「サリーとアン課題」が用いられた。

「サリーとアン課題」は、「サリーがビー玉を籠の中に隠して外出する。ところが、アンがビー玉を籠から出して箱の中に移してしまう」という話を聞かせ、被験児に「戻ってきたサリーは、ビー玉がどこにあると思っているか」と質問するものである。

「スマーティ課題」は、ストーリーを除いて単純化したものである。チョコレートの箱を用意し、中に鉛筆を入れる。それから被験児にチョコ

レートの箱を見せ、中身を尋ねると、被験児は「スマーティ」あるいは「チョコレート」と答える。ふたを開け、実際には鉛筆が入っていることを示した後、「外で待っている友達はこの箱の中に何が入っていると思うだろうか」と質問するものである。

ストーリーの無い「スマーティ課題」の結果も「マクシ課題」と同じく、一次的信念は4歳になると獲得されるという結果であったため、3歳児が一次的信念課題を通過できないのは、ストーリーが理解できないからではなく一次的信念の理解が困難なためだと考えられる。これらの研究から、4歳ごろに、人は現実とは異なる誤った信念(誤信念)をもつ場合があり、それに基づいて行動することを理解するようになると考えられている²⁾。そして、これら一次的信念課題は、自分とは異なる他者の心を理解する能力を試す一般的な方法とされている³⁾。

この一次的信念課題に似た内容として想起されるのは、『どうぞのいす』の話である。

ロバは背中のドングリを「どうぞのいす」の上に置いて眠ってしまう。ロバが眠っている間に入れ替わり立ち代わり動物がやってくるが、「どうぞのいす」の「どうぞ」の意味を「どうぞ座ってください」ではなく「どうぞ召し上がれ」と解釈し、椅子の上の食べ物を順々に食べては置き替えていく。ロバが目覚める直前にはリスが栗を置いていった。目覚めたロバは栗を目にして、ドングリは栗の赤ちゃんだったのかと不思議がる。

最後のロバの台詞は、ロバの立場に立たなければ、理解できない。先に挙げた3つの一次的信念課題を単純化し(傍線筆者、以下同じ)、『どうぞのいす』と比較してみよう。

《マクシ課題》

- ①マクシがチョコを緑の棚に入れる。
- ②マクシの留守中、母がチョコを青の棚に移す。
- ③マクシは緑の棚にチョコがあると思うだろう(と、マクシの心を想像させる課題)。

《サリーとアン課題》

- ①サリーが、籠にビー玉を入れる。

- ②サリーの外出中、アンがビー玉を箱に移す。
- ③サリーは、ビー玉は籠にあると思うだろう（と、サリーの心を想像させる課題）。

《スマーティ課題》

- ①友達はこれまで、チョコの箱にはチョコが入っていることを確認してきた。
- ②友だちが見ていないとき、誰かがチョコを鉛筆に変える。
- ③友だちは、チョコの箱には当然チョコが入っていると思うだろう（と、友達の心の中を想像させる課題）。

上記課題の「マキシ」「サリー」「友だち」は、絵本『どうぞのいす』の「ロバ」に相当する⁴⁾。

《どうぞのいす》

- ①ロバが、ドングリを椅子の上に置く。
- ②ロバが眠る間（見ていないとき）に、様々な動物が訪れ、椅子のドングリは栗に置き換えられてしまう。
- ③ロバは、ドングリが栗に成長したと思うだろう、思っても無理はない（と、ロバの心を想像する課題）。

『どうぞのいす』の読者（子ども）は経緯のすべてを知るが、昼寝したロバには「見えていない」ことへの気付きと「見えていない」立場の心、即ち「人物Aは、Xと思っている」ことの理解、一次的信念課題の通過が試される。

ところで、3歳児に『どうぞのいす』を読み聞かせた例は、データ数が少ない現段階で4例である。絵が愛らしいこの本を学生は3歳児向けに選ぶ。確かに3歳児にも動物が次々と来て食べては置き換えていく面白さは伝わるだろう。だが、ロバの最後の台詞の意味は伝わらない。そのことが、反応が「とても良かった」とする回答が1例だけであることに現れている。

（2）二次的信念課題

二次的信念課題は「人物Bは、人物AはXと思っている、と思っている」理解を測るもので、

「アイスクリーム課題」「誕生日課題」がある。

一次的信念課題との違いは、一次的信念課題が作中人物A一人の心的状態の理解を求めるのに対し、二次的信念課題は作中人物Aの心的状態に関する、もう一人の他者（作中人物B）の心的状態、計二人の心的状態の理解を求める点であろう。誤信念の中身についても、作中人物Aが「物」に誤信念を抱く一次的信念課題に対し、作中人物BがBの視点から見た「他者（作中人物A）の心」に誤信念を抱くのが二次的信念課題と言えるのではないだろうか⁵⁾。

「アイスクリーム課題」とは、「ジョンとメアリーが公園でアイスクリーム屋に出会った時、メアリーはお金を持たなかった。アイスクリーム屋は『一日中公園にいる』と言ったのでメアリーは家にお金を取りに帰った。だが、その後、アイスクリーム屋は『教会に行く』とジョンに告げて公園を離れる。アイスクリーム屋は教会に行く途中、メアリーの家の前を通り、メアリーに教会に行くことを伝えた。その後、ジョンがメアリーの家を訪ねると、メアリーの母が『メアリーはアイスクリームを買いに行った』と言った」という話を聞かせ、「ジョンは、メアリーがどこにアイスクリームを買いに行ったと思うか」と被験児に質問するものである。

この「アイスクリーム課題」から二次的信念は6～9歳の間に獲得されるという結果が得られた。

「誕生日課題」は以下の内容である。「母親は、ピーターの欲しがっていた子犬を誕生日プレゼントに用意したが、子犬を地下室に誕生日当日まで隠しておき、ピーターを驚かすつもりであった。ピーターから誕生日プレゼントは何かと聞かれても母親は『おもちゃを買った』と嘘をついた。しかし、ピーターは偶然、地下室にいる子犬を見つけてしまう。その後、ピーターの祖母が電話で、母親に『ピーターは誕生日に何をもらえているのか』と尋ねる」この話を聞かせた後、被験児に「母は祖母に何と答えるか」と尋ねるものである。

「誕生日課題」では、二次的信念は5歳半までに獲得されるとされたが、この結果は被験児の負担軽減のために要点を強調するなど手がかりを過

剰に与えたとの見方があり⁶⁾、これまでのところ、一次的信念「人物Aは、Xだと思っている」の理解は4～7歳、二次的信念「人物Bは、人物AはXだと思っている、と思っている」の理解は6～9歳に獲得されるもので、両者間に約2年間の開きがあると見られている。

筆者には、『十二支のはじまり』の話が二次的信念課題に似たものとして想起される⁷⁾。その展開を簡単に説明しよう。

ある時、神様は動物たちを呼び、元日に早く到着した順に、一年の間、動物の王とすることを約束する。ねこは期日を忘れ、ねずみに尋ねるが、ねずみは故意に一日遅い日を伝える。ねずみを信じたねこは一日遅れて到着したため、十二支から外れてしまう。今もねこがねずみを追いかけるのは、そのためである。

二次的信念課題は「人物Bは、AはXと思っている、と思っている」の理解を測る。初めは人物Aが誤信念をもつが、その後Aは（Bの知らないところで）正しい情報を得る。そのため後には逆に人物Bが誤信念をもつ。「アイスクリーム課題」では、途中で売り場が変更されメアリーは誤信念をもつ。「誕生日課題」では、ピーターは母親から「おもちゃを買った」と偽情報を与えられ誤信念をもつ。だが、人物Aは後に正しい情報を得る。そのため、その場面にいない人物B（「アイスクリーム課題」の「ジョン」、 「誕生日課題」の「母親」）の方が、人物Aが未だ偽情報を信じていると思い、誤信念をもつことになる。「人物Bは、人物AがXだと思っている、と思っている」構造である。

『十二支のはじまり』では、ねずみ（人物B）がねこ（人物A）に偽情報を与え、ねこは誤信念をもつが、後に正しい情報に気付く。ねこが気づく場面に、ねずみは存在せず意識もはたらかないために、ねずみが誤信念をもつ。

『十二支のはじまり』を誤信念課題の形に近づけるならば、「ねこはねずみの言葉を信じて、1月2日に神様のもとに到着した。このとき、ねこの到着を知らないねずみに、『ねこはいつ来るのか』と尋ねるとどのように答えるだろうか」と被験児に問うことになる。

もともと、1日遅れて到着したねこは必ずねずみの嘘を知る。ねこが真情報を得るのは「必然」である。その点、「アイスクリーム課題」「誕生日課題」の人物Bが「偶然」に真情報を得ることとは異なる。ねずみがねこに与えた偽情報は、ねずみの身に災いが降りかかるに決まっている失策であり、そこに話の面白さもある。

『十二支のはじまり』を二次的信念課題に見立てた場合の回答は、「ねずみは、自分が十二支に選ばれることだけを考えて、深い考えもなく、ねこを騙してしまったのです。だから、ねこがいつ来るかなど考えもしなかったのです」という答えになる。子どもにここまで整然とした回答を望むべくもなく、誤信念課題として適切とは言えないだろう。ただ、筆者が言いたいのは、『十二支のはじまり』の話は、「ねずみ」の心（「ねこ」の心）の理解があって初めて楽しめるという点である。ねこがねずみを追いかける絵に「勘弁してくれ。嘘をついて悪かった」「今更何を言う。許すものか」というねずみやねこの心を理解して、話を理解したことになる。

二次的信念課題のストーリーを簡略化して示し、『十二支のはじまり』と比べてみたい。

《アイスクリーム課題》

- ①ジョンはメアリーと一緒に、アイスクリーム屋から一日中公園で売るつもりだと聞く。
- ②メアリーがお金を取りに家に帰った間に、アイスクリーム屋は教会に売り場を変える。
- ③メアリーは、偶然アイスクリーム屋に会えたので、売り場の変更を知り得た（ジョンはそのことを知らない）。
- ④ジョンは、メアリーは公園にアイスクリーム屋がいると思っている、と思っている（と、いうジョンの心を想像する課題）。

《誕生日課題》

- ①母親はピーターにプレゼントを用意する。
- ②母親は、ピーターに「おもちゃを買った」と嘘をつく。
- ③ピーターは、母親が隠している「子犬」を偶然見つける。（母親はそのことを知らない）。

- ④母親は、ピーターは誕生日のプレゼントをおもちゃだと思っている、と思っている（と、母親の心を想像する課題）。

《十二支のはじまり》

- ①ねずみとねこは神様の伝達を聞く。
 ②ねずみは、ねこに偽の情報を伝える。
 ③偽情報を信じたねこは1日遅れで到着し、ねずみの嘘を必然的に知る。（ねずみは、自分が偽情報を与えた後のねこの行動を全く念頭においていなかった。見ようともせず、考えもしなかった。）
 ④ねずみはねこのことは全く忘れていた。（と、ねずみの心を想像する課題）。

『十二支のはじまり』と二次的信念課題は同じ構造であり、「人物Bは、人物AがXと思っている、と思っている」の推測ができて『十二支のはじまり』の話が理解できる。

更に視点を変えて、文章構成の面から『どうぞのいす』と『十二支の始まり』を見ると、「入れ子」型構造が共通点である。ちなみに外枠と内枠に分けると、『どうぞのいす』の外枠は「ロバが椅子にどんぐりを置き、眠ってしまう。目を開けると、椅子の上には栗があった」という話、内枠は「ロバが眠っている間に、様々な動物がやってきて椅子の上の食べ物を変えていった」という話である。『十二支のはじまり』の外枠は「ねずみが猫に嘘を教えた。ねずみに騙されたと気付いた猫は、ねずみを追いかけてまわすようになった」という話、内枠は「ねずみをはじめ、十二の動物は神様のもとに駆け付けた」という話である。図に示すと『どうぞのいす』が図1、『十二支の始まり』が図2になる。

図1

内枠		動物が食べ物を 入れ替える	
外枠	ロバが眠る	(見ていない)	ロバが起きる

図2

内枠		十二支が到着	
外枠	鼠が猫を騙す	(見ていない)	猫が鼠を追う

図1図2の共通点は、外枠の「ロバ」「ねずみ(ねこ)」に「見えない場所」で内枠が展開される（誤信念が生じる）点である。ロバの見えないところで食べ物が入れ替えられ、ねずみに見えないところでねこが到着（ねこに見えないところで十二支が到着）する。一次的信念課題の「マクシ」「サリー」「友達」、二次的信念課題の「ジョン」「母親」すべて、「見えない」状況に置かれ、ストーリー全体を知る被験児が「『見えなかった』人物の心を推測する」ことに通じる。

一方、異なる点は、外枠が『どうぞのいす』では作中人物一人、『十二支のはじまり』では二人が関わる点である。このことは、読者（子ども）にとって、前者が「自分とは異なるロバの心」を理解する一次的信念課題、後者が「自分とも異なり、作中人物同士でも異なる心」を理解する二次的信念課題に通じることを示している。前者より後者が約二年後に獲得されるという知見から、『どうぞのいす』は4～7歳、『十二支のはじまり』はその2年後の6歳～9歳で理解可能になると予測される。

他の絵本にも同様の該当例があるだろう。「心の理論」をふまえた絵本選びが必要である。

7. 複数人物の情感を伝える技法

学生の読み聞かせで子どもに受けが良い絵本は、絵で魅せるもの（『キャベツくん』『ねえ、どれがいい?』など）やピンポイントでひきつけるもの（『さつまのおいも』など）である。これらは、幅広い年齢層から一通りの反応を引き出す（上記Aタイプ）。それに対して、『はらぺこあおむし』、『わたしのワンピース』、『しろくまちゃん』のほっとけーき』など幅広い年齢層に受けがよいが年齢ごとに異なる反応を引き出す絵本（上記Bタイプ）は、その年齢の反応を予見した上で、効果的な読みの工夫（たとえば、擬音語・擬態語の印象付け、年齢に応じたアレンジや言葉かけ）が求められる。

そして、「登場人物の心の理解」「逆さ言葉の理解」など、対象児の発達の最先端にある能力（発達の最近接領域）に関わる絵本（上記Cタイプ）

は、丁寧に伝える技法が求められる。特に登場人物の心の理解に関わる「地の文と会話文の別」「複数の登場人物のうち誰の言葉かを明らかに伝える声音の使い分け」「心情を豊かに伝える情感の込め方」「話全体の展開をふまえたメリハリのついた表現（山場の盛り上げ方、新情報の強調）や余韻の残し方」の技法が求められる。冒頭に掲げた3歳児対象の『ぞうくんのあめふりさんぽ』『ねずみのいもほり』『そらいろのたね』、4歳児対象の『くれよんのくろくん』など、学生が苦戦する絵本は、それらの技法を求めるものであろう。複数の登場人物の心は、子どもには未だ理解されないかもしれない。それでも学生側は、物語全体を把握して結末に至る伏線を丁寧に押さえつつ、登場人物の心を十分に伝える読み聞かせを目指すことが望ましい。

学生一人ひとりが、なぜその絵本を選ぶのか、伝えたいメッセージは何か、話の展開上大事な部分はどこか、伏線はどこかの分析が必要である。このことは言うまでもなく学生一人ひとりの「文学的感動」によって（説明や理屈ではなく）体得される能力であろう。今更の感はあるが、保育者以前に一人の人間として20歳なら20歳なりの「文学的感動」体験が基盤となる。養成校教員は、学生個人の基盤を耕しつつ、保育者として子どもによりよく伝えようという熱意をもたせる必要がある。

8. 今後の展望

以前は実習直後でも絵本の題名を覚えていない学生が少なくなかった。振り返りシートの回数を経るごとに、子どもの表情を確認しながら読み聞かせし、体験に学び、改善する態度が身につくつある。シート記入の習慣化により、絵本選択の

段階から話の全体を把握し、子どもの反応を予測した準備を図りたい。

なお、本稿は幼児教育学科学生の読み聞かせを論じたが、現場の保育者のそれと比較した場合、対象年齢に応じた読み方（上記Bタイプ）、情感豊かな読み方（上記Cタイプ）において差が大きいと予想される。保育者志望の学生にとっての改善課題は、その差を縮めることにある。

注

- 1) 松本久美子「1次の信念課題、2次の信念課題についての考察—誤信念課題の構造分析を中心に—」『早稲田大学大学院教育学研究紀要』別冊16号-2
- 2) 『発達』「他者のこころの理解と発達」144号 2015年10月25日 ミネルヴァ書房P14、P22 など
- 3) 清水益治・森敏昭編著『0歳～12歳児の発達と学び 保幼小の連携と接続に向けて』北大路書房2013年P17、P75など
- 4) 注1論文の「空間」「時間」による分析に則るならば、ロバが眠ることは空間的不在と同じ意味をもち、時間面でも①昼寝前が「過去事象」、②昼寝中が「直前事象」、③昼寝後が「未来事象」に該当する。
- 5) 注1論文は、従来の二次的信念課題の妥当性を疑問視し、一次的信念課題との差を「情報量の差」のみかとするが、作中人物が別の作中人物の「思い（心的状況）」に関して誤信念をもつ（被験者自身とは異なる人物B、更に人物Bと異なる人物Aが登場する）点で、筆者は従来の二次的信念課題を有効と考える。
- 6) 林創『児童期における再帰的な心的状態の理解』教育心理学研究 第50巻2002年P43-53
- 7) 注1論文の「空間」「時間」による分析に則るならば、ねずみがねこに嘘をついて競争の場に居合わせないようにすること（及びねずみはねこに伝えた自分の嘘をその後は忘れていないこと）は、空間的不在の意味をもち、①神の伝達を聴くことが「大過去事象」、②ねずみがねこに嘘をつくことが「過去事象」、③ねこが辿り着いてねずみの嘘に気付くことが「直前事象」、④ねずみにねこの動向を尋ねることが「未来事象」に該当する。